高等学校評論文指導に関する研究の展開と課題
―全国大学国語教育学会発表要旨集 1993-2023 年の検討を中心に―

愼野 拓海
（京都教育大学大学院連合教職実践研究科 大学院生）

Development and Issues of Research on Critical Essay as Teaching materials in High Schools
－A Review of the Collection of Abstracts of Presentations 1993-2023 of Japanese Teaching Society of Japan－

Takumi SHINNO

2024 年 9 月 30 日受理

抄録：1993 年から 2023 年に発行された全国大学国語教育学会『大会発表研究要旨集』に掲載された発表要旨を中心に、評論文指導に関する研究の展開と成果の把握を試みた。その結果、1990 年代から 2000 年代にかけて評論文指導に関する研究の基本的な枠組みが定位され、2010 年以降には指導理論の構築が志向されるとともに指導目標の拡張と整理の動きが見られ、現在に至っていることが明らかとなった。また評論文指導に関する研究の課題を踏まえて、今後の研究展望を述べるとともに文献目録を作成した。

キーワード：評論・論説文、高等学校、研究動向・展開、先行研究レビュー

Ⅰ．問題の所在と本稿の目的

1. 問題の所在

高等学校国語科教科書には、説明的文章教材として「評論・論説文」(以下「評論文」(ⅰ))が掲載されており、高等学校国語科における学習指導において大きな位置を占めている。しかし、評論文指導に関する体系的な研究や実践は小学校や中学校の説明的文章教材や文学的文章教材に比べると少なく、国語教育学研究をレビューした全国大学国語教育学会編(2002,2013,2022)においてもほとんど触れられていない(ⅱ)。

ただし、国語教育研究学において盛んに取り上げられてきたとは言い難い評論文指導の研究ではあるが、研究の蓄積がないわけではない。守田は 1990 年代後半から評論文教材に対する学習者の反応や国語科教師の持つ評論文教材観、評論文教材の特性など多様な観点から研究を進めている(守田 1996,2000a,2001a 等)。また、2010 年代には澤口(2013)による評論文教材の「クリティカル・リーディング」に関する実践的な研究、篠崎(2012a,2014c 等)による評論文教材の教材研究方法の提案などが見られ、評論文指導に関する研究は増えてきている。一方で、指導の目的が多岐にわたっていることや学習者の実態が多様であることなどを背景に、評論文指導の意義や目的は曖昧な部分が多くなっていると思われる。またその結果、評論文指導に関する研究もそれぞれが拡散的に進められており、その全体像が把握しづらくなっているという側面があると思われる。評論文指導およびその研究を取り巻くこのような状況は、今後評論文指導の改善に資する研究成果を積み重ねていく上で大きな障害になり得るものである。以上のことから、評論文指導に関する研究の見通しを持つためにも先行研究を整理し、これまでの研究のために設けられた視座を解明するとともに今後の研究展望を描く必要があると考える。

2. 研究の目的

上記の問題意識のもと、本稿では以下の 3 点を研究目的として設定する。

① 1993 年から 2023 年まで約 30 年間の評論文指導に関する先行研究の展開および成果を整理し、その特徴を明らかにする。

② 評論文指導に関する研究の文献を整理し文献目録を作成する。

③ 先行研究の展開・成果を踏まえて、追究すべき研究課題について考察するとともに今後の展望を描く。

3. 研究の方法

本稿では、以下の手順で研究を進める。

⑴　1993 年から 2023 年に発行された全国大学国語教育学会編『大会研究発表要旨集』に掲載されている「発表要旨」のうち、高等学校評論文指導に関するものを検出する。

⑵　1993 年から 2023 年における評論文指導に関する研究の動向および主要論者を把握するとともに、評論文指導に関する研究についての主要文献目録を作成する。

⑶　主要論者の発表内容の検討を中心に、評論文指導に関する研究の展開と成果を明らかにするとともに、追究すべき研究課題について考察し、今後の展望を述べる。

なお、本稿では 1993 年から 2023 年までの約 30 年間を調査対象の時期としているため、それ以前に見られる個別の評論文教材についての指導研究などは考察の対象外とした。

Ⅱ. 検討対象の選定と検討方針

1. 検討対象について

J-STAGE 上で閲覧可能な全国大学国語教育学会編『大会研究発表要旨集』(以下『要旨集』)を対象に〈発行年が 1993 年〜2023 年かつ「タイトル」または「キィワード」に「評論」または「論説」を含む〉という条件で検索したところ、計 46 件の発表要旨が確認された(検索日 2024 年 8 月 31 日)。その後各発表要旨の内容を確認し、小学校や中学校を対象にしていた 6 件の発表要旨については検討対象外とし、表 1 に示す 40 件を検討対象として選定した。

なお、各発表要旨の内容を確認した上で、理論的な研究は「理論」、実践報告は「実践」とし、その両方にまたがるものを「理論/実践」に分類した。また、発表内容が論文化されていることを確認できたものには「○」、確認できなかったものについては「×」を付した[iii] (確認日 2024 年 8 月 31 日)。

2. 評論文指導に関する研究動向の概観および区分の設定

評論文指導に関する研究動向を把握するにあたって、1993 年から 2023 年までの約 30 年間を便宜的に 3 つの時期に区分することとする。なお、括弧内の丸数字は表 1 の各発表要旨の番号と対応している。

本調査を通じて確認された 90 年代の評論文指導に関する研究発表はわずか 2 本である。その後、2000 年頃から緩やかに研究発表が増え始め、守田庸一による評論文教材に対する学習者の反応の分析や評論文教材の特性に関する考察など継続的な発表(表 1 ②③④⑧)が見られるようになる。また、2000 年代の後半には難波博孝が小学校から高等学校までの説明的文章教材を対象に「論理/論証」についての考察を行なっている(表 1 ⑨⑩)。本稿では、評論文指導に関する研究がほとんど見られない 90 年代から守田を中心に徐々に研究発表がなされるようになった 2000 年代を評論文指導に関する研究の第 1 期と捉えることとする。

2010 年以降、評論文指導に関する研究発表は急激に増えており、特に澤口哲弥と篠崎祐介の 2 名は 2010 年頃から約 5 年間の間に多くの研究発表を行なっている。澤口はクリティカル・リーディングを軸にした評論文指導に関する実践研究(表 1 ⑪⑬⑭⑯⑱⑲⑳㉑㉔)を精力的に発表しており、篠崎はハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した評論文教材の分析手法の提案や評論文の定義に関する問題についての考察などを行なっている(表 1 ⑮⑰㉒㉕)。また、この時期には上記の 2 名による継続的な研究の他にも、間瀬他の高等学校段階における高次読解力評価に向けた読解モデルの提案(表 1 ㉗)や幸坂の評論文学習における学習者の〈自分ごと〉認識に関する継続研究(表 1 ㉘㉛㉜)なども見られる。その後、2018 年から 2019 年には研究発表が確認できず 2017 年が一つの画期となっていることを踏まえて、本稿では 2010 年から 2017 年までを第 2 期と捉えることとし、以降の 2018 年から 2023 年までを第 3 期と捉えることとする。

2017 年以降、研究発表が見られない時期があったものの、2020 年以降には再び発表がなされるようになっている。第 3 期は第 2 期と比べると該当する期間も短く研究発表の数も少ないが、その中でも登城千加と松井萌々子が複数回発表を行なっている。登城は、発達や学習上の特性を持ち読解力に困難がある学習者に対する効果的な評論文指導のあり方についての研究を行なっている(表 1 ㉞㊱)。また、松井は日本文化論教材の史的変遷について教科書調査をもとに考察している(表 1 ㉟㊲)。この時期には、コロナ禍という特殊な状況下において小泉が

取り組んだ動画配信形式での評論文指導の実践報告(表１㉝)や、評論文の学習を文学的文章の読みへと接続しようと試みた木村の実践(表１㊵)など特徴的な実践が確認できる。

3. 各時期の主要論者の選定

上述の通り、本稿では1993年から2023年までの約30年間を大きく３つの時期に区分した。その上で、筆頭発表者として２回以上研究発表行っており、かつ評論文指導に関する研究をテーマに２件以上の論文を執筆・公表している人物を主要論者として選定し、以下の通り把握した。なお複数の発表内容を一つの論文にまとめている場合は、１件の論文化としてカウントした。

第１期(1993年～2009年)：守田庸一、難波博孝

第２期(2010年～2017年)：澤口哲弥、篠崎祐介、幸坂健太郎

第３期(2018年～2023年)：登城千加

表 1　検討対象の発表要旨

番号	発行年	巻号	発表者	発表タイトル	分類	論文化
①	1995年	89巻	松村吉祐	評論文の文体論的指導の研究の分析−坂口安吾「ラムネ氏のこと」−	理論	○
②	1999年	96巻	守田庸一	評論教材に対する学習者の抵抗感−教材・学習者間におけるずれを中心に−	理論	○
③	2000年	98巻	守田庸一	評論教材に対する学習者の反応−テクスト評価の分析・考察を通して−	理論	○
④	2001年	100巻	守田庸一	評論文の読みにおける間テクスト性	理論	○
⑤	2001年	101巻	渋谷博之	「評論文指導の研究」（高校）−読解を小論文指導につなげる−	理論	×
⑥	2003年	104巻	守田庸一	国語科教師の評論・論説教材観−教材研究の記述とインタビューの記録から−	理論	○
⑦	2004年	107巻	村田克也	高等学校 評論教材実践史の一考察 −小林秀雄「平家物語」「無常といふ事」を中心に−	理論	×
⑧	2007年	113巻	守田庸一	評論・論説教材における批評に関する考察	理論	○
⑨	2009年	116巻	難波博孝	メタ教科／領域としての「論理」の内容・目標・評価 −学習指導要領・井上尚美・宇佐美寛などに見られる混乱をどう乗り越えるか−	理論	○
⑩	2009年	117巻	難波博孝	論理／論証教育の思想−教材に即して考える−	理論	○
⑪	2010年	118巻	澤口哲弥	評論教材を自分自身の問題にひきよせる読みの試み −高校現代文の実践−	理論	○
⑫	2011年	120巻	秋山尚克	高校評論文教材における《他者》の問題 −岡真理「虚ろなまなざし」を視座として	理論	○
⑬	2011年	120巻	澤口哲弥	評論教材におけるクリティカル・リーディングの可能性	理論/実践	○
⑭	2011年	121巻	澤口哲弥	評論教材におけるクリティカル・リーディングの実践的研究	理論/実践	○
⑮	2011年	121巻	篠崎祐介	〈コミュニケーション的行為論〉による評論文教材の考察 −「水の東西」（山崎正和）を対象に−	理論	○
⑯	2012年	122巻	澤口哲弥	社会的クリティカル・リーディングの実践的研究 −問題解決の過程を透明化する評論文指導−	理論/実践	○
⑰	2012年	122巻	篠崎祐介	評論教材「未来世代への責任」の考察 −コミュニケーション的行為の理論を援用して−	理論	○
⑱	2012年	123巻	澤口哲弥	クリティカル・ライティングにつなぐ読みの実践的研究 −「読むこと」を「書くこと」へ活かす評論文指導−	理論/実践	○
⑲	2013年	124巻	澤口哲弥	クリティカルに読み、書くための評論文指導−論証のレトリックに着目して−	理論/実践	○
⑳	2013年	125巻	澤口哲弥	クリティカル・リーディングとその評価に関する実践的研究 −評論文指導におけるテストの開発と実際−	理論/実践	○
㉑	2014年	126巻	澤口哲弥	問いを立てる力を育むクリティカル・リーディング −高等学校における評論文指導−	理論/実践	○
㉒	2014年	126巻	篠崎祐介	評論文とは何か−小中高の連接に向けて−	理論	○
㉓	2014年	126巻	辻尚実	ルーブリック作成を通じて理解を深める授業づくり −「広告の形而上学」の授業実践を通じて−	理論/実践	×
㉔	2014年	127巻	澤口哲弥	適用読解・複眼的読解を軸とした評論文のクリティカル・リーディング −「ミロのヴィーナス」を教材として−	理論/実践	○
㉕	2014年	127巻	篠崎祐介 幸坂健太郎 黒川麻実 難波博孝	グループインタビューによる高等学校教員の意識調査 −評論文読解指導の意義と課題をテーマとして−	理論	○
㉖	2014年	127巻	長谷川祥子	「論説」の文章評価の一考察	理論	○
㉗	2014年	127巻	間瀬茂夫, 守田庸一, 宮本浩治	高等学校における評論の読みの学力評価−学力調査による分析−	理論	○
㉘	2016年	130巻	幸坂健太郎	論説・評論の自律的な読みに資する〈自分ごと〉認識についての検討	理論	○
㉙	2016年	131巻	松本圭祐	高校評論教材「想像する力」の授業分析−自分の考えを形成する過程−	理論/実践	○
㉚	2016年	131巻	李軍	評論指導における絵本の活用−「ミロのヴィーナス」と「ぼくを探しに」−	実践	○
㉛	2017年	132巻	幸坂健太郎	論説・評論の読みにおける〈自分ごと〉認識の理論的検討 −中等国語科で育成を目指す資質・能力を踏まえて−	理論	○
㉜	2017年	133巻	幸坂健太郎, 難波健吾	論説・評論の読みの指導でいかに学習者の〈自分ごと〉認識を引き出すか −高校1年生を対象とした実践−	理論/実践	○
㉝	2020年	139巻	小泉尚子	「遠隔授業」における評論文学習指導（高等学校） −動画配信形式の授業で「読む」指導から「書く」指導に繋げるまで−	実践	×
㉞	2021年	140巻	登城千加, 間瀬茂夫	生徒の学習特性に応じた評論文の読解方略指導の課題	理論	○
㉟	2021年	140巻	松井萌々子	「水の東西」採録史−いつからどのように定番教材化したのか−	理論	○
㊱	2021年	141巻	登城千加	米国における介入プログラムから見た読解力に困難がある高校生に対する指導の課題	理論	○
㊲	2021年	141巻	松井萌々子	日本文化論教材の変遷−第1次・第2次「現代国語」教科書の分析−	理論	○
㊳	2023年	145巻	伊藤まりか	評論文読解指導における目的意識の醸成 −学習者の問題意識に基づき、教材に新しい価値を付与する読み−	実践	×
㊴	2023年	145巻	愼野拓海	高等学校評論・論説教材の教材特性と指導意識の関係に関する研究−−教材特性の類型化を中心に−	理論	×
㊵	2023年	145巻	木村季美子	評論から小説教材のジェンダー批評へ−谷村志保『雪ウサギ」を用いた実践−	理論/実践	×

Ⅲ．評論文指導に関する研究展開の把握

本章では、前章において便宜的に設定した３つの時期に分けて、評論文指導に関する研究の展開とその特徴を把握する。なお、各期の研究動向や特徴を把握は、同じく前章において主要論者として把握した６名の発表内容を中心に確認した上で、適宜その他の発表者の研究発表内容についても言及するという形で行った。また、発表内容の把握には主に発表要旨を用いたが、入手できた当日発表資料および発表内容を基に執筆されたと思われる論文等についても適宜参照した。

1．第１期-1993 年～2009 年-

⑴第１期の主要論者の発表内容概観

〇守田庸一

第１期の主要論者である守田の研究発表は大きく次の４種類に分類することができる。

①　学習者の評論文テクストに対する抵抗感についての理論的考察(表１②)
②　学習者の評論文テクストに対する反応の分析(表１③④)
③　高等学校国語科教師の評論文指導の意識に関する考察(表１⑥)
④　評論文教材の批評性に関する考察(表１⑧)

①　学習者の評論文テクストに対する抵抗感についての理論的考察(表１②)

守田は、学習者が持つ評論文教材に対する抵抗感が産み出される要因について、バフチンの示した概念を援用しながらそのテクストの生産背景に着目した考察を行っている。守田は、国語教科書に所収されている評論文教材の多くが高校生を対象に書かれていないため、テクストと学習者の持つ社会的文化的状況とが異なり、そのような差異が教材・学習者間において見られるずれの原因であると述べる。その上で、評論文教材の読みをテクストと学習者という異なる社会的文化的状況を背景に持つ差異ある〈他者〉どうしの〈対話〉としてとらえ、教材に対する抵抗感を〈他者〉との〈対話〉の契機とし表現の意味が想像されるような学習指導のあり方の追求が必要であると主張している。また、評論文が教科書に所収され評論「教材」となることによってその権威性はさらに高まることを指摘するとともに、教材としてのテクストの権威が前提とされることによって、学習者の抵抗感は隠蔽され、受動的な読み手として位置付けられてしまうことも指摘している。

②　学習者の評論文テクストに対する反応の分析(表１③④)

守田は、学習者が評論文教材を「面白いか・面白くない」という観点から評価した記述の分析を通して、学習者の反応について考察している。この調査を通して、叙述内容と自らの認識内容や認識方法と照らし合わせたり叙述方法と自身の表現観や表現方法とを照らし合わせたりするなどの多様な反応が見られることや、個々の学習者の多様な反応にはそれに対立する別の学習者の反応が存在していることなども明らかにしている。また、評価対象とは異なる既読のテクストを想起している間テクスト的な読みの反応が見られることを踏まえて、評論文および学習者の読みの間テクスト性についての考察を行ない、間テクスト性を活かした評論文指導を検討する必要があると述べている。

③　高等学校国語科教師の評論文指導の意識に関する考察(表１⑥)

守田は、４名の高等学校国語科教師による評論文教材の教材研究の記述の分析と考察を踏まえて、同一の国語科教師を対象にインタビュー調査を行い、その結果について報告している。このインタビュー調査を通じて、各教師が共通して評論文には独自性が要求されると考えていることや、その独自性を叙述方法にこだわって考える教師がいること、筆者の伝記的な事実や他の著作をも視野に入れた筆者重視の教材観を持っている教師がいることなどを明らかにしている。また、各教師の持つ教材観とそれぞれが求めている読みのあり方、授業のあり方などとの関係についても考察を行うとともに、「論理」という語の意味内容が十分に吟味されないまま使用されている可能性なども指摘している。

④　評論文教材の批評性に関する考察(表１⑧)

守田は、評論文を価値判断の言説である批評として捉え、その批評のありように注目して評論文教材間の共通点や相違点を考察している。守田は、評論文教材の中には筆者の印象に基づいた批評が存在するとして、その教材例として「水の東西」(山﨑正和)を挙げている。また、このような印象批評である「水の東西」の持つ説得力

は、論証によってというよりはレトリックの効果によるものと考えられるとして、そこで用いられているレトリックを指摘している。加えて、評論文教材には印象批評が見られる一方で、「学問(研究)」や「哲学」への接近を窺わせるテクストもあるとして、その例として「ものとことば」(鈴木孝夫)を挙げ、批評の差異を指摘している。また、評論文教材間の関係性について検討するために教材の配列を確認した上で、そうした配列に即して教材を扱う際に必要となる視点についても言及している。

〇難波博孝

難波は、学習指導要領における「論理」の位置付けの検討や国語教育学における「論理」に関する先行研究の分析を踏まえて、国語科で扱うべき「論理」および「論証」の内実について考察している(表１⑨⑩)。

なお、発表要旨からはその内容を把握することは困難であるため、ここではその詳細な内容についての報告は避けるが、同氏の研究内容は 2009 年以降の一連の論考にまとめられている。

⑵第１期の展開概観

第１期は、評論文指導に関する研究の基本的な方向性が示された時期であると言える。中でも、守田の一連の発表によって定位されている〈評論文テクストの特性に関する問題〉〈学習者の評論文教材に対する意識・反応の問題〉〈国語科教師の評論文指導に対する意識の問題〉の 3 点は評論文指導に関する研究の最も基本的な枠組みと言えよう。また、難波の「論理/論証」のあり方に関する議論は、〈評論文テクストの特性に関する問題〉を扱ったものであると同時に、評論文を含む説明的文章の指導においてどのような能力を育成するのかを考察したものであり〈評論文指導における目標についての問題〉について検討したものと捉えることもできる。

この時期に定位された評論文指導に関する研究の方向性や学習指導のあり方に関する提言は、以降の実践研究や指導理論の構築にあたっての基本的な考えとして引き継がれており、その意味で第１期は後の評論文指導に関する研究を強く方向づけた時期であると言える。

2. 第２期-2010 年～2017 年-

⑴第２期の主要論者の発表内容概観

〇澤口哲弥

澤口は継続的な実践的研究を行い、「クリティカル・リーディング」の指導理論の構築を試みている(表１⑪⑬⑭⑯⑱⑲⑳㉑㉔)

澤口は、評論文教材の「学習の手引き」や指導書における「学習指導のねらい」の分析を通して、学習者がクリティカルに評論文教材に向かい合うことを意図するような教材観が希薄であることを明らかにするとともに、既存の学習活動にどのような要素を加味すればクリティカル・リーディングを実現することができるかについて考察している。なお、澤口はクリティカル・シンキングの定義をもとにクリティカル・リーディングを次のように定義している。

> 文章中の複数の情報の関連を論理的にとらえ、筆者の意図や目的を推論すること。また、その書かれ方について効果を分析し、評価するとともに、自らの知識・経験や既有の価値観と照らし合わせながら価値と価値との対話を図ること。(表１⑬,p.109)

以降、澤口は自身の評論文教材のクリティカル・リーディングの実践について、授業のスクリプトや生徒を対象にしたインタビュー調査をもとに分析するとともに、評価問題の検討など多角的な視点から研究を進めている。また、指導理論の構築および改善の過程で、澤口のクリティカル・リーディングは、問題解決の過程の透明化に加えてテクストの社会的文脈を強く意識した読みへと拡張されていくとともに、トゥルミン・モデルやレトリック論などの知見を援用したクリティカル・ライティングへの接続も目指されている。なお、澤口の一連の研究発表は、修士論文(澤口,2012)および博士論文(澤口,2019)に発展的にまとめられている。

〇篠崎祐介

篠崎の研究は大きく次の３種類に分類することができる。

① ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した評論文指導のあり方に関する考察(表１⑮⑰)

② 評論文の定義に関する考察(表１㉒)

③ 高等学校国語科教師の評論文指導の意識に関する調査(表１㉕)

①　ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した評論文指導のあり方に関する考察(表１⑮⑰)

篠崎は、評論文教材の扱いを理論的に保証する方法論や目標論が未確立であるとして、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を援用し、評論文指導のあり方について考察している。篠崎は、コミュニケーション的行為の理論を援用して「水の東西」(山崎正和)と「未来世代への責任」(岩井克人)の教材分析を行い、それらの教材について考えられる教育内容や教育方法、教材としての価値について検討するとともに教材分析の方法としての有効性を検証している。また、コミュニケーション的行為の理論を評論文教材の分析に援用する意義として、教材の系統や連関を捉えやすくなること、「論理/論証」について包括的に扱うことができること、社会形成に繋がる討議能力の育成が可能になることの３点を挙げている。

②　評論文の定義に関する考察(表１㉒)

篠崎は小中高における論理的文章の系統的な指導に向けて、評論文という文種をどのように捉えるべきかについての考察している。発表要旨からその詳細を把握することは困難であるが、当該発表を踏まえた論文において、「アブダクション」によって「ディスクルス」を志向する文章という評論文の仮説的な定義が提案されている[iv]。

③　高等学校国語科教師の評論文指導の意識に関する調査(表１㉕)

篠崎は幸坂らとの共同で国語科教師の指導意識に関する調査も行っている。篠崎らは「評論文読解指導の意義」と「評論文読解指導における工夫と課題」をテーマに半構成的に実施したフォーカス・グループ・インタビューによって得られたデータの分析を通じて、国語科教師が評論文指導に見出している意義と指導の上で直面している課題の網羅的な把握を行なっている。

なお、上記の篠崎による一連の研究は博士論文(篠崎,2015)に発展的にまとめられている。

〇幸坂健太郎

幸坂は評論文が学習者の日常と繋がらず、意欲的に学習に取り組むことができない実態を踏まえて、〈自分ごと〉をキーワードに「自分と結びつける」読みの指導理論の構築に向けた継続的な研究を行っている(表１㉘㉚㉛)。幸坂は自己調整学習理論や「からだメタ認知」の研究を援用した理論的な考察を進めた上で、高校生を対象にしたインタビュー調査の分析を行い、「自分と結びつける」読みの質的な差異として、テクストを〈実感する〉こと、〈引き受ける〉こと、説得の〈相手になる〉ことを見出している。そして、「〈実感する〉こと」や「〈引き受ける〉こと」を重視するだけではテクストの内容面のみの扱いの偏ってしまうとして、「説得の〈相手になる〉こと」を国語科の評論文学習における重要な指導事項として価値づけた上で、学習者が「説得の〈相手になる〉こと」を意図した実践の分析も行なっている[v]。

⑵その他特徴的な発表内容の検討

1993 年から 2023 年までの間に 2 回以上発表を行なっている論者に間瀬茂夫がいる。筆頭発表者としては１度しか確認されなかったため本稿では主要論者として選定しなかったが、第２期における特徴的な研究として間瀬茂夫他(表１㉗)についても言及することとしたい。

間瀬他は、2008 年度版学習指導要領の改訂に伴う言語能力観の変化やより高次な学力についての評価を試みようとする学力評価の考え方が広がってきていることを踏まえて、ヴァン・ダイクとキンチュによる文章理解モデルや PISA 型「読解力」、国語教育学研究の成果などを参考に高次読解力を措定するとともに、以下の高次読解力評価のモデルを提案している[vi]。

①読みの構えを問う…本文を読む前に、読み手の既有知識を用いて推測を行うことでテクストに関わる力を問う。

②本文を問う…本文に明示的な情報・内容を理解する力を問う。

③テクスト世界を問う…非明示的な内容を推論・解釈し、テクスト世界を理解する力を問う。

④書き手と読み手との関係を問う…テクストにおける表現方法・技法やレトリックなどの効果を分析し、評価する力を問う。

⑤テクスト世界と現実世界の関係を問う…テクスト世界における問題と読み手が存在する現実における問題とを関連させて考える力を問う。(間瀬,2015,pp.225-226)

⑶第２期の展開概観

第２期の特徴の一つに、第１期になされた守田の学習指導のあり方の提言を踏まえた指導理論の構築が志向さ

れるとともに、〈評論文指導における目標についての問題〉が大きな関心事となったことが挙げられる。例えば、澤口は「クリティカルな読みの能力」を、篠崎は「社会形成能力」の育成を新たに評論文指導の目標に据えている。この他、間瀬他の高次の読解力を評価するための読解モデルの提案や幸坂による国語科として扱うべき学習者の〈自分ごと〉認識についての考察もまた、評論文指導における目標についての検討という側面を持つ。また、第１期において定位された〈評論文テクストに関する問題〉に関しては、篠崎によってハーバマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した教材分析手法についての考察や評論文概念の再定義という形での発展的な積み上げが見られ、〈学習者の評論文教材に対する意識・反応の問題〉についても幸坂が〈自分ごと〉認識をキーワードに研究を進めている。その一方で〈国語科教師の評論文指導に対する意識の問題〉については、篠崎他によるフォーカス・グループ・インタビューが見られたものの、その目的が国語科教師の有する評論文指導の意義や課題についての網羅的な把握にあったため、教師の指導意識の内実を掘り下げる方向には進んでいないという点も指摘できる。その他の特徴としては第１期には見られなかった実践的研究が多く報告されたことが挙げられる。

3. 第３期-2018 年～2023 年-

⑴第３期の主要論者の発表内容概観

○登城千加

登城は、読解力に困難を抱えている学習者が一定数存在しているという文部科学省の指摘やインクルーシブ教育の高まりを踏まえて、読解力に困難を抱える学習者に対する効果的な指導のあり方の検討を行っている(表１㉞㊱)。登城は、読解力に困難のある生徒を対象に、米国におけるリテラシー教育や間瀬が提案した読解モデルなどを踏まえて構想した実践を１年間にわたって実施しその成果と課題を報告している。また、その実践を通して把握された課題を踏まえて、米国のリテラシー教育の考え方やリテラシー向上のために取り組まれている介入プログラムとその具体的な介入のあり方に関する先行研究等を参照し、分野別リテラシーの観点から評論文の読解指導を捉えること、教師・生徒に明確なリテラシー観を持たせる取り組みを行うこと、評論文の読解における目標を定めるとともにその目標に基づいたアセスメントツールを作成することなどを研究課題として定位している。

⑵第３期の展開概観

第３期は、第１期や第２期と比べると期間が短いことやコロナ禍の時期とも重なったことなどもあり、発表数自体が少なくなっている。しかし、コロナ禍という特殊な状況下において動画配信形式で行った小泉の実践報告(表１㉝)や松井による日本文化論教材の変遷に関する調査研究(表１㉟㊲)、学習者の問題意識に根差したテーマ設定により学習者の読みの目的意識の醸成を図った伊藤の実践(表１㊳)など実践的な研究が多く確認できる。また、読解力に困難のある学習者を念頭に置いた指導理論の構築を志向している登城の研究は従来の研究とは大きく異なり、評論文指導に関する研究の新たな展開の方向性が示すものとなっている。

4. 1993 年から 2023 年の展開概括

1993 年から 2023 年までの評論文指導に関する研究の展開を検討した。約 30 年間の展開は次のように概括することができるだろう。

まず、第１期にあたる 1990 年代から 2000 年代を中心に評論文指導に関する研究の基本的な方向性として、〈評論文テクストの特性に関する問題〉〈評論文教材に対する学習者の意識・反応の問題〉〈国語科教師の評論文指導に対する意識の問題〉〈評論文指導における目標についての問題〉が定位された。続く第２期では、第１期に守田によってなされた学習指導の提言を踏まえた指導理論の構築が目指され、一定の成果が挙がった。また、指導理論の構築や学力観の拡張に伴い、「論理/論証」や「クリティカル・リーディング」「社会形成能力」が評論文指導の目標におけるキーワードとして新たに位置づけられるとともに、高次読解力や国語科で扱うべき学習者の「自分ごと」認識という観点から〈評論文指導における目標についての問題〉についての整理・考察がなされた。同時期には教師を対象にしたインタビュー調査によって、国語科教師の評論文指導の意識の網羅的な把握され、多くの探究すべき課題が存在していることが明らかになった。そして、直近の第３期では、読解力に困難を抱えている学習者に対する評論文指導という学習者の特性に焦点に当てられた研究が登城によって進められており、この研究課題の設定に伴い、改めて評論文指導の目標の明確化や学習者の読みの実態の究明など基礎論的な研究の必要性が高まっていると言える。

Ⅳ．先行研究の総括と今後の展望

1．1993 年から 2023 年までの評論文指導に関する研究の成果

ここまで、評論文指導に関する研究の展開を主要論者の研究内容を取り上げる形で把握してきた。以下に多様な展開を見せた評論文指導に関する研究の成果を５つの観点のもと概括する。

⑴評論文テクストの特性

守田、難波、篠崎を中心に評論文テクストの特性についての研究がなされた。特に、守田による社会的文化的属性や批評としての側面に着目した評論文テクストの捉え方は、その後の評論文テクストの基本的な共通理解となっている。また、難波による「論理/論証」という観点からの考察もまた、評論文の特性について検討する上で非常に重要である。この他、篠崎によるハーバマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した評論文教材の分析や評論文の定義に関する考察もまた評論テクストの特性を考える上で示唆に富むものである。

⑵教師の指導意識

守田、篠崎他によって国語科教師の指導意識についての調査がなされた。守田は、国語科教師が記述した教材研究の分析とインタビュー調査を併用し、国語科教師が有する汎用的な教材観について仮説的に把握するとともに、各教師の教材観と指導のあり方や目標との関係についての考察を行なっている。また、篠崎他はフォーカス・グループ・インタビューを用いて、国語科教師が評論文指導の意義として見出していることや抱えている課題について網羅的な把握と整理を行なっている。

⑶学習者の意識・読みの実態

評論文教材に対する意識や読みの実態に関する調査を中心に学習者についての研究も進められた。守田は学習者の評論文教材に対する反応の分析を行い、その特徴について考察している。また、幸坂は「自分ごと」認識についての理論的な考察と学習者を対象にしたインタビュー調査をもとに、「自分と結びつける読み」の質的な差異を見出している。近年では、登城が学習者の読みのつまずきに焦点化した調査を行なっており、上記の他にも実践的研究の中で学習者の意識や反応について言及が多々見受けられる。

⑷評論文指導の意義・目標・評価

指導理論の構築や学力評価の考え方の発展などに伴って評論文指導の目的や意義が拡張されるともに、評価のあり方についての考察もなされた。特に、「論理/論証」や「クリティカルな読み」「社会形成能力」といった観点は約 30 年間の評論文指導の展開の中で特に言及が多くなされた。また、間瀬は国語教育学研究の成果や文章理解モデルやレトリック論の知見などを踏まえて高次読解力の評価を目的とした読解指導モデルを提案している。その他、幸坂による「自分ごと」認識についての研究もまた、評論文指導における指導事項を明確にすることを意図したものだと言える。

⑸指導理論の構築

澤口によって「クリティカル・リーディング」に関する指導理論が構築されたことが最も大きな成果として挙げることができる。また、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を援用した指導理論の構築を試みた篠崎の一連の研究も、評論文指導のあり方についての示唆に富むものである。

⑹その他の成果

『要旨集』の検討の中では言及することができなかった成果としては、篠崎祐介・三上剛・幸坂健太郎・佐藤正直が「国語教材選択システム」を共同で作成したことが挙げられる[vii]。このシステムにより類似度が高い教材を検索することが可能になり、複数教材を用いた実践の困難さが軽減された。この他、教材史や実践史に関する調査研究も少ないながら確認できた。また、評論文指導の活発化を目指し様々な工夫を凝らした実践報告や実践研究も多く確認された。

2．探究すべき課題と展望

上述の通り 1993 年以降の約 30 年の間に一定の研究成果が積み重ねられてきた。一方でいくつかの課題も見出された。以下に、探究すべき課題と展望について述べる。

1 点目は基礎論的な調査の不足である。例えば、学習者の読みの反応については、守田が 2000 年代前半に行なった調査の後は、実践的研究の中で触れられる程度で本格的な調査はほとんど行われていない。近年では登城

が学習者の読みのつまずきに焦点を当てた調査を行なっているものの、現状評論文に対する学習者の意識や反応について十分な積み上げがなされたとは言い難い。学習者の読みの実態を明らかにすることは、指導の際の焦点を明確化したり、学者者の反応を授業場面でどのように価値づけるかを検討したりする上で不可欠な視点であり、今後更なる研究が必要である。また、教師の指導意識についても守田と篠崎他の調査しか見られず、その具体的な内実について考察の余地は大きい。教師の指導意識が授業のあり方を強く規定することを踏まえれば、日々の実践を改善し充実させていくためには指導理論を提案するだけでなく指導意識そのものを変革していく必要があると思われる。そのためにも国語科教師の指導意識を明らかにするとともに、指導意識を相対化するような視点を提供することが必要であろう。また、古賀(2023[viii])が指摘するように国語科教師の授業を構想・実践・修正していく過程において、どのような実践的な知を用いているかについての知見の蓄積も求められている 。この他、守田や篠崎を中心に評論文という文種の特性や個別の教材の論証構造や表現特性の分析はなされているものの依然としてその蓄積は決して多くない。今後高等学校の評論文教材に見られる批評のあり方を明らかにするとともに、中学校までの説明的文章との系統性も視野に入れた考察が必要になると思われる。

2 点目は、評論文指導の目標の曖昧さである。篠崎他の調査が明らかにしているように、国語科教師が考える評論文指導の目的や意義は多岐にわたっている。社会の変化や関連諸科学の発展に伴う学力観の更新などによって、指導の目的や意義が拡張的に把握されることは半ば必然的なことではあるが、一方で指導目的に関する一定の共通理解は不可欠である。もし指導目的に関する一定の共通理解がなされなければ、それぞれの研究や実践は局所的・一時的なものとなり十分にその成果を積み上げていくことが困難になるからである。その点、間瀬(2015)が提案した評価モデルの枠組みはこれまでの先行研究の成果を踏まえて読みの能力を多層的に把握したものであり、一つの共通理解基盤となり得るものであると思われる。

3 点目は、実践的な研究についてである。これまでにも評論文指導の実践報告や実践的な研究は多くなされてきたが、継続的な実践研究に絞るとその数は非常に少なく、実践に基づく知見の蓄積は十分ではないのが現状だと思われる。今後評論文指導を充実させていくためにも、基礎論的な研究の成果を踏まえた継続的な実践研究による知見の蓄積が必要になってくると考える。

3. 結びに変えて

結びに変えて、本稿が検討対象とした発表要旨の発表者が執筆した学術論文や学位請求論文等を中心に作成した文献目録を示す。紙幅の都合上掲載することができなかった文献も多々あり[ix]、評論文指導に関する研究の文献を網羅したものではないが、基礎的な資料として今後の研究の一助としていただければ幸いである。

【注】

(ⅰ)国語教育学研究において「評論」と「論説」が区別されることもあるが、本稿では「評論文」で統一した。

(ⅱ)国語教育学研究の成果をレビューした全国大学国語教育学会編『国語教育学研究の成果と展望』の 2003 年度版と 2013 年度版ではほとんど言及されておらず、2022 年度版においても説明的文章指導の展開の中でわずかに言及されている程度である。

(ⅲ)発表内容が学位請求論文にまとめられている場合にも「〇」を付した。

(ⅳ)篠崎はこの定義について、「『評論文』は一般に当たり前だと思われていることに対して、常識で判断できないように思われる事実を挙げ、問題を投げかけることによって、公共的な議論を求めるための文章である」と言い換えている（篠崎,2014a)。

(ⅴ)幸坂の発表内容は論文化に際して多くの発展が見られたため、幸坂(2015,2019a,2019b)を多く参照した。

(ⅵ)本稿では発表の後に改良が加えられた高次読解力評価のための読解モデルを示している(間瀬 2015)。

(ⅶ)以下の URL からアクセスすることができる。(確認日 2024 年 9 月 30 日)
https://sites.google.com/s.hokkyodai.ac.jp/jltmd/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0?authuser=0

(ⅷ)古賀洋一(2023)「説明的文章の読みの学習指導の充実に向けて-公開講座の成果と見えてきた研究課題」

(ⅸ)例えば、広島大学教育学部国語教育会『国語教育研究』(2009,2015)や早稲田大学国語教育学会『早稲田大学国語教育研究』(2015)、明治書院『日本語学』(2013,通巻 418 号)などに評論文に関する特集が組まれているが、紙幅の都合上文献目録に収めることができなかった。

文献目録

番号	筆者	年	論文タイトル	出典情報
1	土部弘	1993	論説・評論の主題と要旨	国語表現研究会『国語表現研究』, pp. 1-14
2	坂田達紀	1995	文章表現のレトリック-評論文の場合-	国語表現研究会『国語表現研究』(8), pp. 25-35
3	守田庸一	1996	評論文の読みに関する理論的考察	中国四国教育学会『教育学研究紀要』(42-2), pp. 108-113
4	守田庸一	1997	評論文の読みの内的過程に関する研究	広島大学教育学研究科　修士論文
5	坂田達紀	1998	小林秀雄「無常といふ事」の表現特性-文章レトリックの観点から-	国語表現研究会『国語表現研究』(11), pp. 23-35
6	松村吉祐	1999	評論文の文体論的指導の研究（その1）-坂口安吾『ラムネ氏のこと』の作品分析-冒頭と結尾の叙述分析-	大阪教育大学国語研究室『国語教育学研究誌』(20), pp, 29-40
7	守田庸一	1999a	評論文の学習指導のあり方に関する考察	中国四国教育学会『教育学研究紀要』(45-2), pp. 85-90
8	守田庸一	1999b	評論文の授業における学習者の読みの形成要因に関する考察	広島大学『広島大学教育学部紀要』(48-2), pp. 21-30
9	守田庸一	2000a	評論文の叙述方法に関する学習者の反応	中国四国教育学会『教育学研究紀要』(46-2), pp. 67-72
10	守田庸一	2000b	評論テクスト観に関する考察-共通の社会文化的状況を背景にもつ他のテクストとの連関性に着目して-	大阪国語教育研究会『野地潤也先生傘寿記念論集』pp. 162-171
11	坂田達紀	2001	評論文の説得力について	国語表現研究会『国語表現研究』(13), pp. 80-91
12	守田庸一	2001a	国語科教師の評論教材観に関する考察	中国四国教育学会『教育学研究紀要』(47-2), pp. 31-36
13	守田庸一	2001b	評論教材に対する学習者の抵抗感の形成要因とその読みのあり方に関する考察	鳴門教育大学『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』(16), pp. 135-143
14	守田庸一	2002	評論文の授業における学習者間の読みの差異-対話としての読みの交流を成立させるための試論-	鳴門教育大学『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』(17), pp. 169-177
15	守田庸一	2003	国語科教師が持つ評論教材観の共通性	鳴門教育大学『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』(18), pp. 149-158
16	松村吉祐	2003	評論文の文体論的指導の研究（その2）-坂口安吾『ラムネ氏のこと』《上》の文章展開における想の転移の分析-	大阪教育大学国語研究室『国語教育学研究誌』(23), pp, 69-86
17	守田庸一	2004	批評としての評論・論説文-テクストにおける筆者の価値判断への着目-	大阪国語教育研究会『中西一宏先生古稀記念論文集』pp. 233-242
18	間瀬茂夫	2004	教材の批評性と学習者をつなぐ読みの指導	東京法令出版『月刊国語教育』pp. 32-34
19	松村吉祐	2004	坂口安吾「ラムネ氏」のこと《中》の文章展開の分析-《想の転移》の連繋と周辺の文体的特徴-	大阪国語教育研究会『中西一宏先生古稀記念論文集』pp. 214-232
20	村田克也	2004	高等学校国語科評論文「失われた両腕」の教材史	横浜大学国語教育研究会『横浜国立大国語教育研究』(20), pp. 38-76
21	守田庸一	2005	論説・評論の学習指導-〈価値判断〉と〈対話〉の成立	倉澤栄吉・野地潤家監修『朝倉国語教育講座2 読むことの教育』, pp. 117-134, 朝倉書店
22	森田信義, 葛原 昌子	2005	批評を生み出す評論文指導の実践	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 学習開発関連領域』(53), pp. 83-92
23	守田庸一	2006a	評論・論説の授業に関する学習者の意識-大学生を対象とした調査の分析と考察を通して-	世羅博昭先生御退任記念論集刊行会『世羅博昭先生御退任記念論集』pp. 270-279
24	守田庸一	2006b	国語科教師の論理観に関する考察	静岡大学『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』(37), pp. 1-9
25	守田庸一	2007	教材の表現特性を再考する-評論・論説文における論証の検討	日本国語教育学会『月刊国語教育研究』(417), pp. 36-37
26	難波博孝	2009a	母語教育の教育内容の妥当性の担保について-特に説明文/評論文教材について-	広島大学教育学部国語教育会『国語教育研究』(50), pp. 47-56
27	難波博孝	2009b	論理/論証教育の思想(1)	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(1), pp. 21-30
28	難波博孝	2010	論理/論証教育の思想(2)-論理の教育および論証の妥当性について-	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(2), pp. 21-29
29	新船孝, 永吉寛行	2011	高校時代の評論文(小説などの文学作品以外の、論理的文章の授業について	日本大学国文学会『語文』(140), pp. 90-112
30	難波博孝	2011	論理/論証教育の思想(3)-テクストの観点から見た、論理/論証-	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(3), pp. 49-52
31	田中宏幸, 小野奈央	2011	現代評論文の学習を通して思考力・記述力を高める高等学校国語科授業の研究-山崎正和の評論「水の東西」を用いた「比べ読み」「重ね読み」の実践-	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部, 文化教育開発関連領域』(60), pp. 59-66
32	秋山尚克	2012	高校評論文教材における《他者》の問題-岡真理「虚ろなまなざし」を視座として-	山梨大学国語国文学会『国語・国文と国語教育』(19), pp. 150-163
33	澤口哲弥	2012	高等学校国語科における評論文教材のクリティカル・リーディングに関する実践的研究	三重大学大学院教育学研究科　修士論文
34	篠崎祐介	2012a	〈コミュニケーション的行為論〉による評論文教材へのアプローチ-「この村が日本で一番」(内山節)の考察-	中国四国教育学会『教育学研究紀要（CD-ROM版）』(57), pp137-142
35	篠崎祐介	2012b	「コミュニケーション的行為の理論」を援用した評論教材の研究-「水の東西」を例に-	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 学習開発関連領域』(61), pp. 131-139
36	田中宏幸, 辻尚実	2012	高等学校国語科における「読み」を深める評論文の授業に関する研究-詳述を取り入れた「知識の扉」(港千尋)の授業実践を通じて-	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部』(61), pp. 77-84
37	難波博孝	2012	論理/論証教育の思想(4)-論理と読むことの授業-	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(4), pp. 55-66
38	森大明	2012	高等学校国語科において評論文を学ぶ意義に関する考察	中国四国教育学会『教育学研究紀要(CD-ROM版)』(58), pp. 541-546
39	篠崎祐介	2012c	社会形成の向上のための教材の開発に向けて-評論「未来世代への責任」を対象にして-	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(5), pp. 11-18
40	田中宏幸, 小野奈央	2012	現代評論文の学習を通して思考力・記述力を高める高等学校国語科授業の研究(2)-清岡卓行の評論「手の変幻」を用いた「比べ読み」「重ね読み」の実践-	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部, 文化教育開発関連領域』(61), pp. 85-92
41	渡邉久暢	2012	高校国語科評論文における読解方略指導のあり方-学習者による「ふりかえり」に焦点をあてて-	福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター『福井大学教育実践研究』(36), pp. 1-12
42	坂田達紀	2012	国語教材としての評論文について-より良い読解指導のために-	四天王寺大学『四天王寺大学紀要』(54), pp. 215-232
43	金子萌, 幾多伸司	2012	高等学校「現代文」評論教材では何を教えているのか←平成23年度版「現代文」の場合-	鳴門教育大学国語教育学会『語文と教育』(26), pp. 70-81
44	守田庸一	2013	評論・論説教材の関連性に関する考察	三重大学教育学部『三重大学教育学部研究紀要』(64), pp. 149-157
45	澤口哲弥	2013	高等学校における評論文のクリティカル・リーディング -思考の過程を可視化する学習指導-	全国大学国語教育学会『国語科教育』(74), pp. 54-61
46	坂田達紀	2013	評論文教材の表現と主題-「比較・対照」のレトリックに着目した文章読解の方法-	四天王寺大学『四天王寺大学紀要』(55), pp. 291-308
47	澤口哲弥	2014	評論文教材におけるクリティカル・リーディングの実践的研究	明治書院編『高等学校国語科 授業実践報告集 現代文編Ⅱ 評論・取り組み編』pp. 8-28, 明治書院
48	篠崎祐介	2014a	教材としての「評論文」を定義する-「アブダクション」によって「ディスクルス」を志向する文章-	中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』(15), pp. 31-40
49	篠崎祐介	2014b	社会形成に資する読むことの教育に関する考察	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(8), pp. 95-102
50	篠崎祐介	2014c	論理的な文章を解釈するための教材分析の提案-筆者の思考過程と目的に着目して-	広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 学習開発関連領域』(63), pp. 97-104
51	辻尚実	2014	高等学校国語科における「読み」を深める評論文の授業に関する研究-考える主体を育成する「大人の条件」(小浜逸郎)の授業づくり-	日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』(37-3), pp. 99-108
52	難波博孝	2014	「日常の論理」の教育のための準備-論証/説明/感化の論理の区別とその内実-	広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座『初等教育カリキュラム研究』(2), pp. 49-61
53	幸坂健太郎	2015	論説・評論を〈自分ごと〉にする国語科の読みの指導理論－学習者の読みの「構え」の形成を中心に-	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(11), pp. 21-32
54	篠崎祐介	2015	高等学校国語科における説明的文章読解指導の研究-相互主体的関係を視座として-	広島大学大学院教育学研究科　博士論文
55	篠崎祐介, 幸坂健太郎, 黒川麻実, 難波博孝	2015	評論文読解指導の現状と課題-高等学校教員に対するフォーカスグループインタビューから-	全国大学国語教育学会『国語科教育』(77), pp. 70-77
56	長谷川祥子	2015	「論説」の文章指導（評価）の一考察	北海道教育大学国語国文学会・札幌『札幌国語研究』(20), pp. 31-45
57	間瀬茂夫	2015	高等学校における高次読解力の評価のあり方-読解力評価問題の活用-	広島大学教育学部国語教育会『国語教育研究』(56), pp. 219-230
58	篠崎祐介	2017	国語科説明的文章の教材配列における計量的分析の可能性-読解教材のネットワーク構築に向けて-	立正大学社会福祉学部『人間の福祉』(31), pp. 157-163
59	松本圭祐	2017	自分の考えを形成する高等学校評論文・論説文指導の研究	京都教育大学教育学研究科　修士論文
60	李軍	2017	評論「ミロのヴィーナス」指導における絵本の活用	解釈学会編『解釈』(63), pp. 29-37
61	安田元気	2017	高校の授業における評論文読解とその動機づけについての量的検討-段階的読解に対する期待と価値の影響-	日本読書学会『読書科学』(59-3), pp. 95-103
62	澤口哲弥	2018	国語科クリティカル・リーディングの研究	広島大学大学院教育学研究科　博士論文
63	幸坂健太郎	2019	論説・評論を「自分と結びつける」ことの概念区分-高校生を対象としたインタビューの分析に基づいて-	日本読書学会『読書科学』(61-2), pp. 77-89
64	登城千加	2019	高等学校における読解方略の自発的な活用を促す授業実践の検討-質問づくりによる動機づけに着目して-	島根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻『学校教育実践研究』(2), pp. 61-76
65	李軍	2019	評論文の批判的読みにおける看図アプローチの活用-学習者の内在的認識の表出を図るために-	日本国語教育学会『月刊国語教育研究』(572), pp. 42-49
66	幸坂健太郎, 難波健吾	2020	論説・評論の読みで学習者が説得の〈相手になる〉指導-「マルジャーナの知恵」（岩井克人）を教材とした実践-	北海道教育大学国語国文学会『語学文学』(59), pp. 45-57
67	篠崎祐介	2020	読解指導における複数教材の選択モデルの検討-高等学校国語科の評論教材の内容的類似性に焦点を当てて-	日本読書学会『読書科学』(62-1), pp. 43-54
68	篠崎祐介, 幸坂健太郎	2020	説明的文章読解指導における複数教材の選択観点	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(21), pp. 1-6
69	登城千加, 間瀬茂夫	2020	高等学校における評論文読解指導の難しさに関する研究-読解に関する調査結果をとおして-	広島大学大学院人間社会科学研究科『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要, 教育学研究』(1), pp. 95-104
70	間瀬茂夫	2020	説明的文章の読解指導における「論理」に関する学力像の更新-中学校・高校段階を中心に-	島根大学教育学部国文学会『国語教育論叢』(27), pp. 172-184
71	登城千加	2021	学習特性に応じた評論文の読みの学習指導-方略の自覚化を中心に-	広島大学教育学部国語教育会『国語教育研究』(62), pp. 51-63
72	登城千加	2022a	米国における介入プログラムから見た読解力に困難がある高校生に対する指導の課題	広島大学教育学部国語教育会『国語教育研究』(63), pp. 88-79
73	登城千加	2022b	高等学校における生徒の学力と学習特性に応じた評論文の読解指導に関する実践的研究	広島大学大学院人間社会科学研究科『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要, 教育学研究』(3), pp. 101-110
74	松井萌々子	2022	日本文化論教材の変遷-高等学校国語教科書の分析を通じて-	早稲田大学教育学研究科　修士論文
75	澤口哲弥	2023	批判的言語意識を育む国語科「読むこと」の指導 －ことばからテクストのイデオロギーを読み解く－	国語教育思想研究会『国語教育思想研究』(32), pp. 65-74